教育機関向け遠隔授業・プログラミング教育支援に関する活用事例紹介

周南公立大学（旧 徳山大学）福祉情報学部

1. 利用機器名

ヤマハ ユニファイドコミュニケーション マイクスピーカーシステム YVC-1000

2. 機器の活用状況(活用授業,イベント概要など)

R3 年度後期からヤマハ ユニファイドコミュニケーション マイクスピーカーシステム YVC-1000 を貸与していただき、講義、イベント、会議等で活用させていただいている。活用事例を以下に記す。

【講義】　R3 年度後期より、本学は、教室の定員を設けて原則対面授業となった。しかし、R3 年度後期には、まだ日本に入国できていない留学生が数十名おり、彼らはオンラインでの受講を継続していた。このたびの遠隔授業支援によって機器を貸与していただき、ハイフレックス講義を実施することができた（講義科目：学習心理学、心理学研究法Ⅱ、心理学実験実習Ⅰ、異文化コミュニケーション）。ハイフレックスで講義を実施することができたことにより、オンライン参加者と対面参加者の間で他の受講生の存在を知り、同じ講義を受講する者同士で意見交換がスムーズにできた。また、同じ専攻の者同士で連帯感が醸成されたようであった。その後、R4 年の春に留め置かれていた留学生が日本に入国し、支障なく合流して、日本人学生と一緒にグループ活動などもおこなっている。

【イベント】　R3 年度は本学の創立 50 周年かつ最後の年（R4 年度から公立化により大学名称が変更）ということで、所属学部では、大学祭期間中にオンライン同窓会を開催した。これまでは、旅費がネックとなって参加者も見込めず、招待もできないので、同窓会を開催するのに二の足を踏むことが多かった。しかし、オンラインであれば参加できる OB／OG も多いと考え、開催を決行した。当日はベトナム在住の OG に近況を伝えてもらうこともできた。在学生が専攻別に近況報告をしたのだが、その際に、貸与していただいた機器と拡張マイク（YVC-MIC1000EX）4 台を接続させて、ハイフレックスで実施することができた。在学生は社会人になった先輩から進路選択のアドバイスを得ることができ、卒業生は現在の大学の様子を知り、後輩や恩師と旧交を温めることができた。

【学内業務】　コロナウイルス感染症の警戒レベルが上下するのと連動して、学内会議がオンラインになったり、対面になったり、ハイフレックスになったりと、開催形態がさまざまに変化した。そのような中でも、貸与いただいた機器を利用して、意見交換がおこなえる会議を開催することができ、有意義であった。

3. 機器活用による効果・利点
   - セッティングが簡単であったので、授業と授業の間の休憩時間が 10 分しかない連続講義の場合でも、ハイフレックス講義が実施できた。
   - 教員の声だけでなく、オンライン参加者の声、対面参加者の声を拾うので、ハイフレックス講義にありがちな、音声が聞こえないことによって、会話の流れが途絶えたり、間延びしたりする感じがなく、講義が進められた。

4. 活用イベント・授業における利用者及び,児童・生徒・学生の感想,雰囲気等
   - オンライン参加の留学生が、ただの聴講者ではなく、受講生として講義時間中に質問したり、対面参加の学生に質問したりする積極的な参加態度が観察された。
   - 対面参加の受講生がオンライン参加の受講生の存在を認知し、意見を求めたり、配慮したりする姿が観察され、受講生の中で連帯感や一体感が醸成された。

5. 写真(児童・生徒・学生の活用している様子が分かる写真。一般公開できるもの(許諾を得たもの)でお願いします)

図 1　オンライン同窓会の様子（2021 年 10 月 30 日）

6. 機器活用における課題・難点
   - カメラがついていないので、ハイフレックス講義の際には、会場や全景を映すカメラを別に用意する必要があった。
   - 機器を 2 台貸与していただいたのだが、(紛失や破損時に弁償することができないため) 相手側に機器を又貸しすることが憚られ、学外の方とハイフレックス同士でディスカッションをすることは叶っていない。
   - 冬場に空調の下にマイクを置くと雑音を拾い、オンライン参加者に聞こえにくいとの指摘を受けた。
   - 持ち運ぶにはサイズが少し大きめだった。スピーカーの網の部分を凹ませないように気を遣った（常時エアークッションで梱包して持ち運んだ)。　　以上